

第2部

日本行動計量学会の 設立まで

日本行動計量学会立ち上げの経緯

丸山 久美子
聖学院大学人間福祉学部

日本行動計量学会が誕生した今から35年前の風景を思い描いて見ると、学生運動たけなわの光景が目につく。学園紛争が本格化した1969年、私は青山学院大学文学部の助手であり、大学が全共闘によって封鎖されていたので、心理学実験もデータ解析も全く出来ない不穏な状況にあった。私は当時統計数理研究所の研究部長だった林知己夫先生の研究室に机を運び、朝から夜まで先生のそばで勉強していた。その頃、本郷の学士会館でイリノイ大学のタッカーの元で勉強して帰国し、立教大学社会学部に奉職した後の俊英であった池田央先生を中心にして「多変量解析シンポジウム」と題する勉強会が開かれていた。メンバーは計量社会学の安田三郎先生、柳井晴夫氏、丸山久美子、時折、様子を見に顔を出した中谷和夫氏、まだ学生であった高根芳雄氏、猪口孝氏の少人数で、タッカーの分厚い本を読んだ。タッカーの弟子であった池田央先生にとっては面目躍如の活気ある勉強会であった。その折、柳井氏がこの会を2000名規模の学会にしたいと言い出した。誰も反対する人はいなかったが、学会にするとすれば知名度の高い大物の理事長が必要である。印東太郎先生、肥田野直先生などの大物の名前が浮上したが、最も説得力があり、社会的に知名度の抜群に高い人物として林知己夫先生にお願いすることになった。たまたま私が林先生の部屋で勉強していたので話は比較的簡単に進んだかに見えた。林先生に学会立ち上げの要点を話し、理事長就任のお願いをするために先鞭を切ったのは柳井氏であった。彼は林先生と会見するために、意気込んで統計数理研究所の門をくぐった。しかし、口を利くのもままならない偉大な先生が相手であったから、その時の柳井氏の様子は極めて小心翼翼の内気な学生風情で、ほとんど私が柳井氏の話の内容を通訳するような形で林先生との話し合いが行われた。この種の話や肥田野先生に持ちかけても、おそらくは一笑に付されたであろう。しかし、林先生には事前に熱烈にこの話を伝えていたので、話は迅速に進んだ。早速、先生は信頼できる優れた教え子であった東京大学教育学部の助教教授であった芝祐順先生に相談した（林先生は少しの間、東京大学教育学部で統計学の非常勤講師をしていた）。すると、芝先生は「この話は時期早尚であり、計画が甘すぎる」と言ったが、若い人達がこんなに熱心に学会設立を希望するのであれば、暫時様子を見て決断することが賢明であると林先生に助言した。この話を林先生から聞いた柳井氏は悄然として部屋を出たが、私は部屋を飛び出して、終日、広尾界隈をさ迷い歩いた。口さがない友人は「流産ですか」と笑い、私は「もう一度必ず生んで見せる」と息巻いた。これはまさに「女の意地」にも等しい覚悟であった。学会が立ち上がったのは1973年である。その間、三度笠を被り、草鞋をはいて、学会立ち上げに貢献してくれそうな理事を探して全国隈なく歩き回った。学園紛争の最中であったから、大学の先生と会うことは極めて困難であったが、さまざまな先生とお会いして学会設立の意向を伝え、理事の承諾を得た。さらに学会員を募るために多くの人々を勧誘しなければならない。事務局を作る必要もある。柳井氏と私の2人ではどうにも覚束ない。そこで、私は、当時電気試験所（現電子技術総合研究所）の技官であった岩坪秀一氏と会った。電気試験所には多くの若手の研究者が存在したが、この話に乗ったのは岩坪氏だけである。それ以降、柳井、丸山、岩坪の3人組

は運命共同体のように初期の学会運営に尽力した。当時、東京大学医学部保健学科疫学研究室の助手であった柳井氏の研究室を学会事務局に設定して、第1代事務局長に柳井晴夫氏が就任した。仕事が立て込んできたので事務局には、更に統計数理研究所の松原望氏、国立教育研究所の梶田叡一氏に加わってもらった。5人の事務局員が決まり、林理事長を筆頭に、東大法学部の碧海純一先生、京極純一先生、医学部の山本俊一先生、工学部の奥野忠一先生、教育学部の肥田野直先生、九州大学文学部心理学の三隅不二夫先生、国立国語研究所の野元菊雄先生、慶応大学の印東太郎先生など忽忽たるメンバーが理事となった。後に、これらのメンバーに加わるのは当時名古屋大学に奉職していた水野欽司先生、立教大学の岡太彬訓氏である。その後、第2代事務局長になったのは名古屋大学から統計数理研究所に移動した水野欽司先生で、先生はエネルギーの全てをこの学会に注ぎ、学会を磐石なものにした。

学会立ち上げ当初の其々のメンバーの思い出は尽きることがないが、その半数は既に物故している。歳月は人を待たない。時の流れは星の瞬きでしかなく、今後行動計量学会がどのような流れに沿って歩むのか知るべくもない。当初の理念は人間の行動を科学哲学的視点から外れることなく、実際のデータを地道に積み上げて、実践の場に還元することである。こうした初期の方針が混沌とした21世紀の社会に、どのように生かされてゆくのは興味ある課題である。

[理事、第34回大会実行委員長]

行動計量学シンポジウムについて

柳井晴夫

聖路加看護大学・大学入試センター名誉教授

日本行動計量学会第1回総会は1973年9月に開催され、本年の大会(2008年9月)で第36回大会を迎えることになった。第1回から今回まで継続して理事を務め、さらに、1994年4月から2000年3月までの6年間、理事長として学会の運営に携わってきたものとして、その感慨もひとしおである。

ここでは、日本行動計量学会の設立に直結した、「行動計量学シンポジウム」について紹介させていただきたい。

行動計量学シンポジウムは以下の4回にわたって開催された。第1回：1969年(記録無し：8月に本郷学士会館分館で開催された。なお、第2回のシンポジウム案内の文面には「第1回大会では、因子分析の諸問題(最尤法、共通性、因子得点、非線形問題)、分散分析と回帰分析、相関関数分析、テストの情報伝達度、尺度解析、最小次元解析、などの多変量解析を中心としたシンポジウムを行ないました(発表数推定9)」という記録がある。この時、筆者自身は、東大教育心理専門課程博士課程3年で、「評価研究室(仮称)」の中心メンバーであったため、この時のメンバーであった、塗師斌・繁榊算男・牧田亮・高根芳雄(当時文学部心理学教室)(以下敬称略)と協力して、第1回行動計量学シンポジウムを開催したものと推測している。第2回の行動計量シンポジウムは1970年8月24日~26日(3日間)(発表数=18) 学士会館本郷分館、および国立教育会館で開催された。つづいて、第3回は1971年8月25日~28日(4日間)(発表数=42) 学士会館本館、第4回：1972年8月30日~9月2日(4日間)(発表数=41、統計数理研究所)で開催された。

第2回行動計量学シンポジウムの案内文には、発起人代表として柏木繁男(国鉄労働科学研究所)、その他の発起人として、芝祐順(当時成蹊大学)、池田央(当時立教大学)と筆者の計4名の名前が記載されていた。第2回のシンポジウムの演題数は18で、第一著者の名前を発表順にならべると、柏木繁男(2演題)・芝祐順・後藤昌司・池田央・丸山久美子・三觜武・柳井晴夫・高根芳雄・塗師斌・繁榊算男・福原文雄・安本美典・佐藤隆博・牧田亨・高橋丈司・肥田野直となる。これら16氏の多くは計量心理学を専門とされていた。第3回になると、発表数は18から42に増加。第2回シンポジウムに発表されず、第3回に発表された方のお名前を挙げさせて頂くと、竹内啓・生沢雅夫・増山英太郎・豊川裕之・大崎紘一・丘本正・加納克巳・久保武士・柳本武美・浦昭二・中山剛・白崎和夫・内藤雅子・関寛治・山下恒夫・中谷和夫・岩坪秀一・林知己夫・西村春夫・田中靖政・前田俊郎・廣瀬弘忠・平山政市・池田一貞・松本浩太郎。その頃から著名であった統計学者の林知己夫、丘本正、竹内啓らが発表者名に名をつらねている。さらには、医学系の研究者が多く含まれている。第4回になって新たに発表された方、および指定討論者のお名前は、杉山高一・佐藤創・岡太彬訓・上笹恒・小川秀光・馬渡鎮夫・野元菊雄・川島武宜・井上通敏・山本幹夫・小室直樹・西村博・伊藤高司・伊藤志摩子・塩見弘・西川泰夫・松木悠紀夫・根岸龍雄・飽戸弘・西平重樹・富永健一・加藤淳一・宮原秀夫・山本俊一・印東太郎・安田三郎・齋藤陽一・西村熙彦・鈴木達三・吉田光雄・大川信明となる。これら諸氏の多くは、著書等で周知であろう。このように、シンポジウムも第3回、第4回と進むにつれ、

行動計量学シンポジウムは心理学の分野だけでなく、法律学、経済学、社会学、言語学、工学、医学・健康科学（保健学）および統計学の領域に浸透した。1972年に第4回までの行動計量学シンポジウムで発表頂いた多数の方々に行動計量学会設立準備委員会に加わって頂き、1973年になって、行動計量シンポジウムにかわって、行動計量学会が設立されたことになる。

なお、行動計量学シンポジウム発足時には、筆者は東京大学教育心理学教室の博士課程に所属していたが、1970年5月より、同じ大学の医学部保健学科疫学教室の山本俊一教授のお招きにより、当教室の助手に就任させて頂いた。それがひとつの契機となって、設立された日本行動計量学会の事務局長に筆者が就任し、事務局も医学部保健学科疫学教室におかれることになった。この時、疫学教室に日本行動計量学会事務局の設置を許可いただいた山本俊一教授および初代理事長に快く就任して頂いた林知己夫氏の英断、さらに丸山久美子・岩坪秀一・松原望・梶田叡一の4氏が事務局員となり、私を含めた5名が機会あるごとに集まって林知己夫氏を補佐したことが、今日の日本行動計量学会の発展の礎となったと思う。なおこれら事務局メンバーが雑誌「数理科学」に以下のような原稿を著していることを明記しておく。

文献：柳井晴夫・丸山久美子・岩坪秀一・松原望・梶田叡一（1974）行動計量学の動向、数理科学、第12巻2号（No.128）、サイエンス社

謝辞：本稿の執筆にあたり、後藤昌司氏よりお送りいただいた第2回行動計量シンポジウムプログラム、および、お知らせ文を利用させて頂いた。記して深謝の意を表したい

[理事、第4代理事長、1987年度（第2回）功績賞受賞]

行動計量学の名称に対する私の想い

池田 央
教育測定研究所・立教大学名誉教授

行動計量学会が設立されて、はや35年が過ぎた。設立当初から学会のメンバーとして、行動計量学の進歩と歩みをともしてきた一人として、ひとしお感慨深いものがある。ここでは設立当初の時代背景も踏まえながら、私が行動計量学になぜ参加し、あきもせずここまで続けてこられたのか、その原点を思い出しながら、わずかなスペースを利用してこれをしたためている。

私が大学生、大学院生だった1950年代は、人文・社会科学において、計量的、数理的方法はまだわずかであり、その大半はそれとは無縁な世界であったといえよう（いまでもそう思っている学生は多いかも知れないが）。経済学ですら全共闘の嵐が過ぎ去る頃までは、そのような意識がまだ多くの学生の間にはあったように思われる。それでも私の所属する心理学は、少数ではあるが優れた先達によって、統計学を中心とする数理的アプローチの重要性が認識されつつあった。

しかし、外国から入ってくる専門雑誌や図書からは、(私に言わせれば) はじめて科学的方法論を取り入れた新しい学問の世界が、新鮮な響きとともに飛び込んできていた。最近では珍しくなくなったせいか、あまり耳にしないが、行動科学 (behavioral sciences) という呼び名もそのひとつである (単数形で呼ぶのと複数形で呼ぶのと枠組みが少し違うのだが)。伝統的な人文・社会・自然科学という分類名称とは別に、行動科学は異なった切り口からの視点を与えてくれた。

そのひとつの特徴は学際的 (interdisciplinary) アプローチである。そこでは研究対象として、生物も含めた人間個人の、あるいは集団としての動き方、行動の研究に直接的間接的にでも焦点が当てられていれば、心理学、社会学、文化人類学をはじめ、言語学、教育学、経営学、法学、政治学等々、その専攻領域を問わないでだれでも入れる寛容さがある。

では、そこでの研究方法はどうか。そこには、なにか共通のアプローチはあり得るのか？それは思弁的でなく、経験的データを集め、そこから情報を取り入れ、解析すること、つまり基本は測定 (measurement) から始まるということである。当時のわれわれの憧れの的は、一歩いや何歩も先を進んでいた専門誌、生物では *Biometrika* (1901創刊)、経済では *Econometrica* (1933創刊)、心理では *Psychometrika* (1936創刊) などがひとつのモデルであった。それに匹敵するものは出来ないものか。誰が言い出したかはよく覚えていないが、こうして行動と計量をあわせた「行動計量学」会が生まれ (1973)、欧文誌として「*Behaviormetrika*」も誕生した (1974創刊)。「行動計量学」は明らかにわれわれの造語であって、ほかには (たぶん) 見られないだろう。その特徴は形が変わることはあっても、上記の精神はいつまでも続くものと思っているし、そうありたいと願っている。

[名誉会員、第6回・第26回大会実行委員長、1992年度 (第7回) 功績賞受賞]

行動計量学という名前

繁 栂 算 男

東京大学大学院総合文化研究科

われわれ学会の会員には行動計量学という名前はおなじみのものであるが、実は、造語である。行動計量学会ができるまでは、このようなタイトルの学問や大学の講座はなかったはずである。行動計量学会は、ご存知のように林知己夫先生の下に結集した力が学会誕生の元を築いたが、そのモーメンタムとなったのは、柳井晴夫先生の情熱であったように思う。当時、柳井先生が中心的に運営されていた研究会でも学会の構想を情熱をこめて語られていた。そのようなときに、学会の名称の話があって、わたしが「行動計量学」というのはどうですかね、と言ったことを覚えている。実際に、この学会の名前を決めた経緯はわからないが、私には、行動計量学という名前に個人的な思い入れがある。

いずれにしても、行動計量学という看板は、なかなかよくできている。行動というからには、まずは、人間の行動を思い浮かべる。行動計量学は、人間、人間の集団、組織、あるいは、さらに、類人猿などの動物などの行動を知的探求の対象とする。行動計量学の対象は無限に広く、また、その対象に迫る学問の切り口は、既成の学問の区分けに影響されない。行動計量学には学際的、融合的な響きがある。

行動計量学は、文字通り、行動を計量するだけが仕事ではない。計量した数値を記述し、整理することによって、知見を引き出す。この知見は、本来そのデータだけに適用できるものであるが、普通は、一般化したい。この一般化において、直感的な推論を避けるためには、数理モデル（あるいは、統計分布に従う項を加えた統計モデル）を作り、モデルをかすがいとして、いまだ観測されないデータ全般に一般化する。心理学という（既成の）領域で言えば、行動という観測可能な事象を数値に変換する理論と技法を研究する計量心理学、数値的データのモデル化について、研究する数理心理学、数値データから、母集団全体やいまだ観測されていない将来のことを推論する心理統計学に対応がつく。どのような領域であれ、この3つの過程が含まれていて、共通の要素がある。共通性を認識することが大事であると思う。

行動計量学では、説明したい行動パターンを、潜在的な構成概念を用いて説明することが多い。ところが、この構成概念の測定値も顕現的な行動からモデルを使って推測されたものである。ここに人間を対象とするサイエンスの難しさがあり、トートロジー的な研究が多発する理由がある。これを避けるにはふたつのアプローチがある。ひとつは、理論の精緻化によって、モデルの比較がクリティカルな意味を持つようにした上で、モデルの相対的な評価をおこなうことである。もうひとつは、行動計量学の手法が、当面する問題解決に実際に役に立つ事例を積み重ねることである。人間行動に関する理論の発展の現状を鑑みると、行動計量学においては、特に、後者の立場、すなわち、現代社会の問題を解決することで存在理由をアピールすることが重要なのではないかと思われる。

[理事、第28回大会実行委員長、元事務局長、1994年度（第9回）功績賞受賞]

日本行動計量学会と柳井さんのこと

柏木 繁 男

城西国際大学アセスメントセンター・千葉大学名誉教授

理事や委員の役割を一度も経験したことの無い私に寄稿の依頼があり、少々当惑しているのですが、ただ、学会設立前夜の柳井さんから相談を受け、若干のお手伝いをしたことは憶えています。計量心理学を取り巻く40年前のわが国の状況をうまく説明するのはそう容易なことではないのですが、人間の行動や心理を数理統計や計量測定することを肯定する気風ではなかったのです。今でも、ご存命の心理学の大先達の中には、統計学や測定手法の導入が心理学をダメにした、と明言される方がいるそうです。私にとっては大変な驚きですが、先日、ある後輩が、初心学生向心理統計の本を出版し、その大先達に進呈した時のご返事に、その趣旨の批判があったそうです。

私個人でも、そのような経験事例は数多くあります。今では、政治、経済、社会生活に対するアンケート調査はごく日常的なことですが、アンケートで世論が分かっていたまらか、と言うのが常識だったと言ってよいでしょう。しかし、こんな私のJR時代の1反例があります。新幹線設立以前の旧東海道に電車特急“こだま”が走っていた頃です。当時特急の東京駅始発は朝9時が常識でした。東海道特急列車の利用者は金持ちが殆どで、朝9時以前の早い時刻の電車には絶対に乗らない、というのがその常識だったのです。そこで、こっそり私個人の責任で、特急列車の乗客に、朝7時で乗るかどうかをアンケートしてみたところ、30%前後の乗客が乗ると答えたのです。そのデータを、当時の旅客局長さんに朝の出勤時に直接手渡したところ、その日の理事会でOKがとれ、朝7時東京発の特急電車こだまが走りだしたのです。若い私の意見を率直に受け入れてくださった当時の旅客局長さんとJRの寛容さには、今でも頭が下がる思いです。

JRの研究所での最初の仕事がマークシート内田クレペリン(UK)テストの客観的評価法の開発です。実用的評価法として当時のJRのデータを使って私が考案したのがPF判定法で、信頼性や基準関連の妥当性が客観的にチェックされ、さらに、最近、作業曲線と性格特性BigFiveとの関連が確認されています。当然、これらの処理はコンピュータなしにはできません。

ところで、新幹線の建設直前、日本に初めて科学計算用コンピュータが導入されました。Bendixというマシンでしたが大学の有名教授連もその見学に多数見えたそうです。私もテスト処理の将来にコンピュータ利用の将来性を確信し、アセンブラーの講習会に出席させてもらいました。それ以来アメリカのPsychometricsやテスト研究に関心を払うようになりました。JRでの第二の仕事は、因子分析法、とくに因子回転法の利用と開発です。因子回転法と言えば、今でもHenry Kaiser氏によるVarimax法がよく使われますが、項目数が増えると、因子回転の効果が上がりません。彼は私の批判を率直に認め、ボスドクとして受け入れてくれました。このような研究制度やシステムがわが国にもあれば、と考えていたとき、柳井さんからの学会設立の希望を伺ったのです。準備的会合開催を一度お手伝いしましたが、後は、専ら柳井さんの努力そのものでした。

これまでに果たしてこられた柳井さんの努力と学会の今後益々の発展を心よりお祈りします。

[第16回大会実行委員長]

師友に恵まれて35年

後藤昌司

特定非営利活動法人 医学統計研究会

日本行動計量学会が満35歳を迎えた。最初に、設立から今日まで諸種の形で関わってきた方々にお祝いを申しあげたい。歌の文句ではないが、「思えば遠くへきた」ことを、いささか感傷的な気分で実感する。本学会には、その前身として「行動計量学シンポジウム」(1970年8月24~26日のプログラムが手許にある)があった。学会の設立に際して、その名称を何にするかの議論があったことを覚えている。当時には、「行動計量」の形容は、統計的データ解析を生業として企業で働いている者にとっては何となく馴染めなかったが、時間を経るごとにその役割と位置を確立したようである。

本学会には、微々たることしか尽力できなかったが、大会への仲間との発表、論文・作品の寄稿などを始め、理事、編集委員など、いろんな形式で参画させていただいた。大会には、仲間の方々と、ほぼ継続して、参加し、発表させていただいた。因に、第1回大会以降、発表・参加していないのは、第23回大会(1995年:私事であるが、企業から大学へ職を変えた、阪神・淡路大震災の年)と海外出張で不在であった第28回大会(2000年)だけである。

この間、多くの師友に恵まれた。いずれも彼岸に先立たれたが、北川敏男先生、林知己夫先生、奥野忠一先生、丘本正先生、脇本和昌先生、駒澤勉先生から多大のご教導を頂戴した。1970年代、および1980年代には、コンピュータ・ソフトウェアは自前で開発していた時代であり、そのうえで、統計科学の理論の学習・研究と実践に精力的に働いた。そこでは、統計的データ解析の過程の諸種の段階で、「技」と「智慧」の獲得が必要であった。現在でも、ご健在でご指導をいただいているのが、小川暢也、赤池弘次、浅野長一郎、佐久間昭、納谷嘉信、永井武昭の諸先生である。

研究主題は、時代の要請とともに、実践に根ざすか、あるいは、必要に駆られた形式で多彩に広がった。当初には、因子分析の検証研究であったが、多変量解析法の全般、比例ハザード・モデルの推測と応用、統計的グラフィクス、回帰係数の縮小推定量、ベキ変換と拡張の諸型、ベキ正規分布の提案と拡張、樹木構造接近法とその応用などになった。

時代の節目でいつも注意していることは、恩師[北川敏男先生]から頂戴した教えである。

「鹿を追う獵師 森を見ず」の戒め:自分の歩んできた道を第三者的に回顧してみることに。

歴史を記してみることに。この教えは、まさに本学会35周年のような機会に参考になる。これから、5年、10年のスパンでいかなる問題領域で自分の進路があるかを探索的に考えてみることに:これも若い仲間と研究にとり組むときの主題の選択に欠かせない教えである。

「新安全学」の提唱について用意し、その構想をたてることに:最近のすべての事象や物の安全が問われるときに、約20年も前にその問題を意識され、筆者に課された洞察のすごさを改めて思い知る。

このように偉人ともいえる師友に恵まれて、最近の虚構ともいえる「仮想現実」の世界で意図することは、「すべての学問は実践を経ることで生命をもつ」ことに倣い、これまで頂戴した教えを自己の哲学に還元し、後続の人たちにつなぐことである。

[元理事、1989年(第4回)功績賞受賞]

日本の学際研究も既に戦後30年の歴史を経過したが、それでも未だ必ずしも常に成功しているとはいえないようだ。どうも日本の学界では、学際コミュニケーションがうまくいかず、それが学際研究の成功をさまたげている。では何故、日本では学際コミュニケーションがうまくいかないのか。

その原因の第一は、何といっても研究者の側の、学際的知識の貧困さに帰せられねばならない。共通の知識と相互理解なしにはコミュニケーションは成立し得ない。日本の大学の、独立性と自己充足性（といえば聞こえはいいが、要するにセクシュナリズム）の強い学部・学科の中で、われわれが研究者としてのパーソナリティ形成期を過ごさねばならないことは、この意味で大変不幸である。

しかし、第二に私がここで強調したいことは、「学際的偏見」とでも名付けうるものの存在である学問分野相互の間で、その学問的蓄積の多少や、基礎科学か応用（又は周辺）科学かの差が存在することは、否定すべくもない。それは丁度、西欧人の皮膚が白く東洋人の皮膚が黄色いのが事実であるのと、同様である。しかし、より基礎的な、蓄積のより豊かな分野を研究している人が、有能かつエライのだ、という考えがあるとすれば、それは人種間偏見と同じような、「学際偏見」といわざるを得ない。

そして白人の中の貧困階層に有色人種への偏見が強いと同様に、学際的偏見もまた、余り有能でない研究者にしばしば見られるのは、当然である。

人間誰しも多かれ少なかれ人種偏見をもっているのと同様、研究者が学際的偏見にとらわれるのも「自然な」現象ではあるけれども、矢張り度が過ぎればハタ迷惑で、学際研究の発展を阻害する。ある著名な社会学者が「自然科学の人達は文科系の人を馬鹿にするから、一緒の会合には出たくない」と洩らされたのをきいて、私は今更のように考えさせられたことがある。

幸いなことに、人種間偏見における人種とは違い、学際偏見の基礎になっている所属学問分野は、生まれながらに決定されているわけではない。大学において一応、終生の所属分野が決められるわけだけでも、その後の勉強で更に自分の所属分野をふやすことが可能である。自分の所属集団に対しては偏見は発生しないから、所属分野をふやすことによって学際偏見を減らすことが出来るし、また他人から受ける学際偏見に耐えることが出来る。

われわれの日本行動計量学会は学際的知識の修得と学際偏見の昇華の場として、大変有効に機能していると思う。欲をいえば、研究発表やパネル・ディスカッションだけでなく、特別講義や研修に類するものもあってよいのではないかと、思ってみたりする。

[会報8号(1976)巻頭言、当時：理事・東京大学文学部、1990年逝去]

(追記) 安田三郎先生は、1972年8月に発足した行動計量学会発足準備委員会の主要メンバーとして、日本行動計量学会趣意書、および、会則の作成にあたり中心的役割を担われた。(柳井晴夫 記)

サイバネティクスから行動計量学へ

井上通敏
大阪大学名誉教授

50年も前の医学生時代にフィードバックという言葉を目にしたので興味本位に遊んでいたらウィナーのサイバネティクスに出会った。今度はサイバネティクスから下ってきたら制御理論、システム理論、情報科学といった大河にやってきた。当時の医学は酵素学が全盛でほとんどの医学研究者はごまんとある酵素についてのアイソザイム、アロステリック効果、インダクションといったことの発見を競い合っていた。これがやがてワトソン&クリックのDNAを起源とする分子生物学という大河に発展するのだが、ぼくは酵素学の研究者が金魚のウンコのように思えて、ウィナーのほうの河を選んでしまった。もちろん、当時はそれが第三の波と称せられるような人類文明の大河に発展するという認識もなかったし、まして医学領域でどれほど膨らんでゆくのかを考えることすらしなかった。

そんなころ、小児科病棟で小児糖尿病の子供が昏睡死したことを耳にした。ベスト(カナダ)がインスリンを発見したのは1921年であるが、その発見のドラマを記した「インスリン物語」(岩波新書)には、それまで助けることができなかった糖尿病性昏睡の子供を劇的に救えたことが非常に印象的に書かれていて、私の医学生時代、日本の一流病院でなぜ死亡するのかと義憤を感じた。さっそく血糖調節機構のモデル作りに着手し、インスリン注入量と血糖値との関係のシミュレーションを行なって昏睡症例に投与するインスリン量の最適化を行なう研究を始めた。この研究を1969年7月20日にシカゴで開かれた国際ME学会で発表したのだが、ちょうどその時刻にアポロ11号のニール・アームストロングが月面に着陸する模様をテレビが実況していた。インスリンとロケットの燃料の違いはあるが、どちらも軟着陸が目的の制御。コンピュータ技術も制御技術も彼我の差は大きかったが、今後の医学医療にサイバネティクスの流れが生まれそうだと感じた一瞬であった。おりしも、1973年に政治学、経済学、心理学、生理学、機械工学、数理工学、医学、疫学といった異なる領域に所属する研究者が、計量的アプローチ、学際的アプローチを基盤にした研究を推進する「行動計量学」が生まれ、林知己夫先生によって日本行動計量学会が設立され、自ら率先して会員となった。私自身はサイバネティクスの延長上に行動計量学を捉えていたつもりだったし、林知己夫先生も同じお考えではなかったかと勝手に決め込んでいる。

1970年代から80年代にかけては、「医学生のための行動計量学セミナー」、「薬と行動計量」「人は形をどのように見ているか - 人のパターン認識」といったシンポジウムを関西地区で開催したこともなつかしい思い出である。

その後、時を経て病院長や独法化された病院機構の理事長を務めさせていただいたが、若いころに学んだサイバネティクスの教えが人生を通して私の判断や行動の軸や拠り所になっているように思う。

[元編集委員、元運営委員]

今年の9月学会が成立してから3ヶ月が過ぎた。この間、学会活動の基礎作りが活発に行われてきた。会員の募集、賛助会員御承諾の御願い、活動の大綱の決定など事務局はよく動いた。運営委員会に小委員会を作って活動を始め、事業計画をたてている。編集委員会は和文誌・欧文誌の部会に分れて検討を重ね、発刊の手筈が整ってきた。学会の収入も大よその見通しがつき、予算計画が出来上り、12月8日の理事会で学会活動の具体的な項目が決定されて、いよいよ実際の活動に入るようになった。各委員会や理事会の決定事項などが次から次へと流れてきて、事務局は寧日ない有様である。

学会が成立してこの様に動きが激しくなる前には、こうなるべき準備期間があった。行動計量学シンポジウムが何回か開かれ、多くの方々が集るうちに学会作りの気運が熟してきたと思われる。正に柿の実の熟して落ちる様にして出来た感じである。ひとたび地に落ちればぱっと拡がる。この様に諸々の活動が生じている。またますます多岐にわたって活発になることが期待される。

学会が何のためにあるか、生ずべくして生じた以上明らかなことであろう。学会活動が有意義になるかどうかは会員の皆様の活動にかかっていると思う。また、学会各委員会のマネージメントの仕方にかかっている。

さて、学際的な会合という場合、既存分野で言う各領域の方々が集って意見を交換し、相互理解を深めるというだけでは不十分である。これは第一歩には違いないが、ここに止ってはいけないと思う。共同研究にまで進まねばならない。各分野の人々が、本務として、ひとつの共通課題の解決という目的の下に集り、研究を協力して進めるということが必要である。このとき既得の遺産としての蓄積はポテンシャルとして、虚心にこの問題解決に取り組まねばならない。そうして文字通り膝付き合わせて考えてゆく、この共同研究の場として、新しい方法論が生まれてきて、しかも課題解決に対して有用なものとなろう。この様な方法論が出来て始めて、これまで解明できなかったことが解明されてくる。こうしたことは既存の各分野にも有用なものとしてフィードバックされてくることにもなろうと思う。協力なくしては生まれてこなかった方法論、これが行動計量学と呼ばれるべきものであろう。既存の方法論の単なる寄せ集めを脱却してゆかなければ進展はない。

以上の様な狙いの実現を目指して一同相励むことが大事であり、これを促進するために学会は活用されるべきものと思う。

[会報1号(1973)巻頭言、初代理事長・統計数理研究所、2002年逝去]